

【実践報告】

子どもと自然・命のつながりを知る 保育実践のあり方を探る

— 8 —

——自然とのつながりを深める——

大仲美智子*・笹井 邦恵*・東 直実*
矢越 里花*・井上美智子**

キーワード：環境教育 自然 保育

1. はじめに

本園では、幼児期の環境教育の観点から、身近に自然を感じ「自然が大好き、大切にしたい」と思える子どもを育てるための保育環境や活動のあり方を探ることを目的に、2010年度から実践研究を始めた。まず初年度は、5歳児のみを対象に実践研究を開始し、2011年度以降はその取り組みを0歳児から5歳児まで拡げ、2012年度は「保育者集団のレベルアップ」を目的に研究推進委員を選出し、菜園係が自然環境を豊かにするよう取り組み、保育者主体で実践研究が進められるよう工夫した^{1)~3)}。2013年度は研究推進委員と菜園係の他にエコ係、絵本係、ポスター係を新たに作って、すべての保育者が役割を担うようにし、2014年度は「保育課程、年間計画の見直し」と「保護者との連携」という課題に対応するため保育課程係と保護者PR係を新たに加えた^{4),5)}。2015年度には新制度の下、保育所から幼保連携型認定こども園に移行し、環境教育についても小学校の各教科の内容で受ける環境教育につながることをより一層意識して取り組むことにした⁶⁾。また、園庭にビオトープを造成する計画を練り、年度末に造成を開始し、「地域との連携」を具体的に進めるために「地域PR係」を設けた。2016年度は保護者や子ども、養成校の学生を巻き込みながら園庭で造成を開始したビオトープにより自然を身近に観察できるようになり、そのビオトープを管理・育成する過程に保育者も関わり、「ビオトープでの子どもの遊び方」「保育者のビオトープでの子どもへの関わり方」「ビオトープの管理方法」などをビオトープ施工管理の専門家から定期的に学ぶことで実践研究を深めてきた⁷⁾。2017年度は前年に引き続き「ビオトープを園生活の一部にするにはどのようにす

*登美丘西こども園（大阪府堺市）

**大阪大谷大学教育学部

ればよいか」「ビオトープの四季をどのように感じるか」「保護者や地域の方が環境教育により一層関心を持つ方法は？」などを保育者が意識して保育するようにした。本実践研究は0歳児から5歳児までの全年齢児を対象に「子どもの育ちを豊かにする」「乳幼児期における環境教育の土台づくり」の二つを最終目標に掲げている。2017年度も引き続きこの目標の下で実践研究を継続した。

2. 実践方法

この実践研究は幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づき、子どもの「主体性」と合わせて、環境教育の観点から「五感」と「つながり」を保育者が意識することを重視している^{8)~10)}。本年度も環境教育の観点から各保育者が保育の中で目を留めた事例を提出し、それらについて毎月研究会を行い、討議することを継続した。保育者が事例を記録する事例記録用紙は変更を加えず昨年度と同じものを使用した¹¹⁾、事例記録用紙には上記の3観点を意識できているかどうかを自ら確認するためのチェック欄がある。そして、保育者は「子どもが自ら切り拓く力を育てる」ことを目標に経験の数・種類を増やすのではなく、一つの経験の内容を豊かにすること、そして、子ども自身の考える力や答えを見つける力を育てるためにどうしたらよいかを考えることに留意しながら実践をするようにした。具体的には、言葉で表現できない0・1歳の子どもの場合には、理解できないと思わず保育者が「感じたこと」「考えたこと」「伝えたいこと」を言葉や身振りで伝え、また、「何だと思う？どんな匂い？触ってみてどう？」など子どもの意志や考えをたずねるようにし、表情やしぐさから保育者が言葉で共感したり、対応したりした。また、2歳から5歳の言葉で表現できる子どもに対しては「調べてみようか？どうしたらいいと思う？なぜ、そう思う？」など、保育者が答えを与えるのではなく、子ども自らが考える過程を含むことを促すような働きかけを意識するようになった。さらに、多様な家庭環境の中で過ごしている子どもがいるため、一人ひとりの自然に対する気持ちや環境への関心度をみながら関わるようにした。

保育者の係活動は、前年度までは研究推進委員・菜園係・エコ係・絵本係・ポスター係・保育課程係・保護者PR係・地域PR係という8種類の係を設けていたが、今年度から①稲作係・②エコ・マネジメント係・③園庭係・④カリキュラム・マネジメント係・⑤玄関ホール係・⑥菜園係の6種類に組み直し、①から⑥のすべての係が絵本やポスター、保護者や地域へのPR・連携を意識していくことを前提に、すべての保育者がいずれかの係を担当し、分担して活動を継続した。毎月の研究会の中では事例検討と共に、係活動を報告して、全員がそれぞれの動きを確認できるようにした。本稿では2017年4月から11月までに取り上げた事例のうち環境教育の観点からみて子どもの育ちが読み取れると思われるものを抽出して考察し、今年

度の保育者の係活動の成果をまとめて報告する。

3. 子どもの活動

3.1 5歳児

〈川の始まり、川づくり〉

本園では3歳児から5歳児クラスまで、堺市南部の里山がそのまま残る「堺自然ふれあいの森」に毎年遠足に出かけており、5歳児クラスだけは年に4回、季節ごとに訪問する。現地のレンジャーさんとは事前に打ち合わせをし、訪問時には年齢に応じた様々な環境教育プログラムを提供していただいている。夏の遠足では、茶摘みをしてお茶作り体験をしたり、森の中にある川の源を見に行くことが予定されていた。そこで、遠足に行く前に、「川の始まりを見に行く」という予定を伝えて、川の始まりはどんなところにあるのか、どのようにして川ができるのか、クラスで子どもたちと話し合う場を持つことにした。「川ってどうやってできるんだろう？」という質問を投げかけてみたところ、「水がたくさん集まってできるんやで！」「雨が降ってきて、それがいっぱいになったら、川になって流れ出すねん！」という意見が出てきた。それを聞いた他の子どもが「そうそう！そうやで！お水がいっぱいになったら、川になるねん。その川の水は海につながってるんやで！」「土にしみこんだ水が、土からぼたぼたしずくになって、それが集まって川になるんやで～！」「川になって海に流れていくんやで！ずっとずっとくりかえしやねん！」「そうそう、くりかえしてるねん！」と、4歳児クラスの時に雲や雨をみては水との関係話を話したり、絵本で海の水が温まって雲になり、雨が降って土が濡れたり、川になって、海に流れ込むという水の循環について学んだことがあったため、自分たちの知っていることを次々と発言することができた。また、5歳児クラスになってからも、「かわ」という絵本を読んで川の始まりは山であることを知っていた。しかし、実際の川の源がどんなものかは想像がつかないようで興味をもち、楽しみにしているようだった。

そして、7月の遠足当日、森の中を歩きながら川の始まりを探しに行った。歩きながら、子どもたちは「どこにあるんやろな～？」「どんなところにあるんやろ？」「水がたくさん出てるんかな？」など疑問に思うことを友だちと話していた。川に沿って歩き始めてしばらくは、歩きやすく道幅も広がったが、だんだん狭くなり、一人で歩くのがやっとの山道になった。川も細い溝になり、溝に沿って山道



を歩くと溝に窪みがあり、上の方から少量のしずくがぼたぼたと落ちていた。夏で晴れの日が続いていたため、土に沁み込んでいる水の量が少なかったのかもしれないが、しずくが少ししか落ちてこないで、みんなは目を凝らしてしずくが落ちる場所を真剣にじっと見ていた。そして、しずくを見つけると「みえたみえた!」「ちょっとやけどおちてる〜!」と歓声をあげた。わくわくしていろいろ想像していた川の始まりが水のたくさんある場所ではなく、わずかなしずくがみえるだけで意外と迫力に欠けていることに気づき、一層、不思議な気持ちになったようだった。そして、しずくが落ちてくるあたりのさらに上の方を見て、そこが山になっていることも確認していた。「雨があんまり降ってないから、ちょっとしかボタボタしてこんのかな〜。」「前に降った雨がず〜っと土の中に残ってて、しみ込んできて、しずくになってるんとちがう?」などの発言をする子どももいた。レンジャーさんから教えてもらった川の始まりの話と、事前にクラスで話し合った川の始まりの様子が同じだということが、現実には山道を歩き目の前で発見して、理解できたようだった。

川の始まりを見に行ってからしばらくたった雨の日、レインコートを着て全員で園庭に出ることにした。今年から雨の日も園庭で遊んだり、観察ができるようにとレインコートを常備している。始めは水たまりに入ってみたり、手の平で雨を受けたりと何となく雨や水に触れているような感じだったが、しばらくすると一人の子どもがスコップを持ってきて、雨でできた大きな水たまりの端を堀り始めた。どうやら水の通り道を作ろうとしているようで、それに気づいた他の友だちもどんどんスコップを持って集まり、水たまりから川ができ始めた。川を掘っていく先にまた別の水たまりがあり、どうやらそこにつなげたいようだった。同じように掘り始めた別の子どもに「何を作っているの?」と聞いてみると、「川作ってるねん! どんどんつ



なげて、あの海(水たまり)につながっていくんやで!」と元気に楽しそうに教えてくれた。それを聞いた別の子どもが「ここの山は小さいから水が少ないねん!」と園庭の小さい築山を指差した。「何で山が小さいとお水が少ないの?」と質問すると、「だってな、山が大きかったらいっぱいお水を吸うけど、小さいからあんまりお水を吸わへんねん。だから水があんまり落ちてこなくて、水が少ないねん!」と答えた。実際は、川づくりで使っている水は水たまりにたまっていた水をすくってきて、堀り進めている川に流しているにもかかわらず、築山から水がきているような答えが返ってきた。つまり遊びであるが、その背後には、山という存在が水を保つという知識があり、大きな山は容積が大きいだけ多くの水を保つに違いないという推論

がある。子どもたちはその後もどんどん溝を掘っていき、ついに、もう一つの水たまり（海）とつながった。「川が海とつながったで！」「すごいな！」と喜び合っていた。この川づくり以来、雨の後などに水たまりがでけると川づくりをする姿がよく見られるようになっている。海と呼んでいる水たまりには、いつからか、船や海に住んでいる動物（砂場の玩具）が仲間入りするようになっていた。「今まで何もなかったのに、なんで船や魚がやってきたの？」と聞いてみると、「だってさ～、海には船が浮かんで、魚も住んでるやん！海にたくさんの魚とかがいたら楽しそうやから！」と話した。園庭にできた海を舞台に少しずつ世界が広がり、小さな子どもたちも一緒に遊び出した。

= 考察 =

普段の生活で「川の始まりはどこ？」という問いを意識することはほとんどない。夏の遠足の前に子どもたちに「近くにあるあの川はどうやって作られるの？」「どうやってできるの？」と聞いたところ、意外にも知っている子どもが多くいた。家庭で川の始まりがわかりやすく描かれている本を読んだという子どももいたが、本園では0歳児からの環境教育に取り組んでいるため、水を扱う絵本も多く、それをクラスで読んでもらうこともある。このクラスは4歳児の頃には水をテーマに話し合った経験もあった。そうした今までの経験の中で学んでいることも多いのではないかと思われ、雨が降る・水がたまる・土が水を吸収する・集まった水が流れ出す・川になる・川の水が海に流れていく・またその水を吸い込んだ雲が雨を降らせるというつながりに既に気づいている子どももいた。本園では常に「つながり」を意識しながら環境教育に取り組んでいるが、生き物と生き物のつながり、コンポストの活用から生まれる生き物と私たちの生活のつながりだけでなく、ゴミの分別とリサイクル、無駄遣いをしないよう心掛けることで資源を大切にす気持ちを持てるようになるなど、身近にある事象はつながりを持っているということに気づいている子どももいる。クラス前の廊下には以前読んだ「かわ」という絵本を広げて掲示した。水の始まりから海までのすべての行程が見え、次々と迷路のように続いていくのが楽しいようで、内容も理解しやすく、よくできた絵本である。家庭でも読んだ

ことがあるという子どももおり、同じ廊下を使う3、4歳児や保護者も興味を持って見ていた。こうした経験が次の年の学びにつながっていくのではないかと考えられる。

堺自然ふれあいの森の遠足では環境教育の専門家からプログラムを提供していただいているが、日頃の園での学びと専門家から提供していただく学びがうまくつながり、知識が深まったり、その後の学びにもつながってい



く。この事例においても、自分たちで考えた遊びの中に、「川の始まり」を探索して得た知識が生かされている姿があった。川から海へ、海に住んでいる生き物は何かなども考えて遊んでいる。5歳児は夏に海水から塩づくりをすることが恒例だが、その時に海にからめて住んでいる魚を掲示し、みんなで魚の写真を見て何の魚か当ててみたり、出世魚の種類や小さい頃から大きくなった時の名前の変化などのクイズを答えたりした経験がある。川の始まり探しにそうした経験も加わり、園庭での川づくりの遊びに様々な知識が活かされ、遊びが広がりを見せていた。日々の保育の中の様々な経験を自分たちでつなぎあわせ、遊びを豊かにしている。「川の始まり」を探ることが、他の活動の経験とつながり、色々な方面に興味や知識が広がり、遊びに活かされていく。

3.2 4歳児の活動

〈アリの観察〉

4歳児クラスは園庭ではよく動物を探すことを楽しんでおり、セミやショウリョウバッタ、アリ、ダンゴムシなどの小さな動物を見つけるのが得意である。菜園の植物や野菜の水やりも好きな子どもたちが多く、すぐに見つけることができるということは、動物が大好きで動物の生態を理解しているからである。また、保育者は保育室にアリについての資料を写真入りで貼り出すなど、子どもの興味に応える環境も意識して作っている。クラスでは当番活動をしていて、ランチ当番、おやつ当番、雑巾当番、ゴミ当番、菜園当番というと5種類の当番活動を、グループに分かれ1週間ごとに順に交代して行っている。菜園にはクラスの活動として週に1度は行き、そこで遊んだり、水やりをしたり、観察したりしているが、菜園当番は毎日おやつを食べ終えた夕方に菜園まで水やりに行く当番である。畑で育てている野菜やそのまわりに咲いている植物の水やりをする。クラスで育てている野菜の成長を観察し、菜園当番以外のクラスの友だちに伝えることも菜園当番の役割である。

梅雨の6月、雨の日が多く、あまり外で遊べず残念そうな様子があるものの、雨上がりの園庭や菜園で雨が上がった後の発見を楽しんでいる姿が見られた。そうした中、めずらしく天気がよく晴れた日の夕方、菜園当番の4名の子どもたちが菜園に水やりに行った。菜園に着くと早速ペットボトルやジョーロに水を入れ、それぞれ好きなところに水やりをした。水やりが終わった頃、I児がしゃがみこんでその場から動かずじっとしていたので、何があったのかかと思い、保育者はI児に近づいて「どうしたの?」とたずねてみた。すると、I児が「でっかいアリいてる」と答えたので、保育者は「本当だね!」と声がけして、しばらく一緒にしゃがんでアリを観察した。餌を探したり常に動き回ったりしているアリの姿はよく見かけるが、そのアリはその場にとどまり前足をしきりに動かし、じっとしていた。いつも見るアリとは違う行動を二人で不思議に思い観察した。I児もいつものアリとすることが違うと感じたのか、アリ

の動きをみて「かゆいところ、かいてるのかな？」と笑い出した。保育者も理由がわからず不思議に思ったので「なんでだろうね」と答えた。不思議に思いながらもその日の2人の観察は終了した。

次の日の夕方、同じ4人の菜園当番の子どもたちが再び菜園に水やりに行った。水やりが終わりアジサイの花を見ていた時、自分たちの足元にアリがいるのをI児とF児が発見した。前日にI児が観察したアリとは違い、何匹ものアリの団体がものすごい速さで動いている。「めっちゃ速っ！みんなで鬼ごっこしてるのかな」とF児がいうとI児が「人が近づいたらにげるねん」と言ったので、保育者が「えっ、どうして!？」と聞き返すと、今度はF児が「こわいから」と答えた。そこで、保育者が「じゃあ、こわがられないためにはどうしたらいいの？」と聞いてみると、F児は「かくれて見る」「近づかないで遠くから見る!」と教えてくれた。しばらく3人で前日とは違う様子のアリの観察をした。

その4日後、園庭で遊んでいると、I児がままごと遊びで使うおわんの中にダンゴムシとアリを一緒に入れているのを保育者がみつけた。「なんで一緒にいれてるの?」とたずねてみると、「ダンゴムシにごはんあげてるねん」と教えてくれた。そこで、「ダンゴムシってアリ食べるの!？」と聞き返してみると、「そうやで」と答えた。保育者はその答えに疑問を感じたものの、アリやダンゴムシの生態について詳しく知らなかったこともあり、後から自分で調べてみるとダンゴムシはアリを食べず、その反対でアリが死んだダンゴムシを食べるということがわかった。それをI児に伝えてみると、「えっ!」ととても驚いた表情をしていた。そんなやりとりを聞いていたのか近くにいた5歳児が、「そーやで!そんなことも知らんの!」と自信ありげに声をかけて、去っていった。するとI児は、アリがダンゴムシを食べることについて「おなかにいっぱい食べて巣にいるみんなに持って帰るのかな?」と考えこんでいた。

しばらくたった別の日、園庭の木にアリが登っているのをI児が見つけ、「こっち来て」と保育者を呼び、木の根元にある大きな穴を指差した。そこから何匹もアリが出入りしていた。「アリの巣かな?」「すごい数のアリやね」「列をつくって何してるんだらう?」と二人で観察し続けると、白いものを口にくわえて運んでいるアリがいるのを発見した。I児が「白いのを運んでる」と声をあげたので、保育者も「本当だ!何か白いの運んでるね。でもこの白いの何やろう」と応じた。I児は「アリ、木の上から降りてきてる」「もしかしてアリのごはんなのかも」と、自分でアリの新たな行動を発見したことがうれしそうだった。そこで保育者は「なるほど、木の上にごはんが



あるから、木を登ってごはんとりに行ってるのかな」「でも白いアリのごはんの正体は何だろうね」とたずねてみた。すると、I 児は「ダンゴムシや虫が死んだのが木の上にいるんちゃうのかな」と言って、立ち上がり木の上の方をみて死んだ虫がいないか探し始めた。しかし、そこでは見つけることができずに残念そうにしていた。アリがなぜ木に登り降りしているのか、アリが運んでいる白いものが何かを一生懸命に考えている I 児だった。

= 考察 =

4 歳児クラスの子どもたちは保育者よりも小動物を見つけるのが得意で、よく「見つけた!」とうれしそうに保育者に知らせてくる。子どもの観察力は優れていて、保育者がどこにいるかわからず「えっどこ!？」とたずねると、「もうっ、ここだよ」と「どうしてわからないの?」というように言われることもある。なかでも I 児のように自然に関心があり観察もよくして動物が好きな子どもは、本事例にみるように様々な場面で動物の行動を観察することができる。その結果、その動物のことを考えることができ、ただ捕まえるだけではなく、動物をじっくり観察した後、どこに逃がせばその動物が喜ぶのかも考えて行動できる。そうした自然への関心が高い子どもたちは、例えば、動物には好きな場所・苦手な場所があり、苦手な場所に放すと、「そこはだめやで」と必ず友だちにも伝えることができる。好きな場所・苦手な場所は動物にとって生きていく上で重要である。生物の生息環境は生物の種類により異なり、生物の生活を守るためには生活環境を理解し、それを守る必要がある。環境教育の実践として自然との関わりが推奨されるのはそのためである。目の前にいる生物のその命を大切にすることはだけでなく、その生物の生息環境を理解し、生存のためには生息環境の保全も同時に必要であることを理解する基礎となるからである。したがって、単に「命を大切にすること」というようなねらいでは、環境教育の育ちにはつながらない。また、この事例では、I 児はアリを驚かさないようにする理由を考えたり、自分自身がアリをゆっくり観察するためにどうすればよいのかを考えている。4 歳児であっても人間とは異なる生活をする生物に対して想像力を働かせることができ、自分とは全く異なる小さなアリに対してもその立場になって考えることができるということでもある。こうした想像力や他の生物への共感性を育てるためには、まず、この事例のように、何度も様々な場面に出会い、共感してくれる保育者と一緒にじっくりと観察をし、その動物の住みやすい環境や生存のために必要な食べ物などを知ることが必要である。これは同時に、子どもが自分の体験を通して思考し、知識を深めていく過程でもある。この担任保育者は本園の勤務 1 年目で、子どもたちとの会話に植物や動物の話がよく出てくることに驚いている。この事例では、ダンゴムシがアリを食べるのかという疑問を保育者が調べ答えを子どもに伝えてしまい、子どもが自分で調べ、考え、判断するように援助できなかったことが課題として残った。

3.3 3歳児の活動

〈雨の日の園庭〉

雨が降ると子どもたちの中で「あ〜あ〜、今日は雨だから外遊びできないな」という暗黙の了解が広がる。保育者もそうで、雨の日は室内で過ごさなければならぬと考えることが通常だった。

7月のことである。子どもたちから「雨の日の園庭はどうなっているのかな?」「草木は雨の日はどのようになっているかな?」という話が出てきた。そこで「じゃ、雨の日に外に見に行ってみようか」と問いかけると、子どもたちは大喜びした。早速、雨が降る日を待ち望んで、天気予報を保育者に確認したり、空を見上げて「雨降るかな〜」と話したりする姿が見られるようになった。保育者も「いつ雨が降ってもいいように、お家にカップを持っている人は持って来ていてね」と声をかけておいた。子どもたちは雨が降るのを心待ちにし「先生、明日は雨降るかな?カップは、ロッカーに入ってるから!」と準備万端であることをアピールしていた。



そして、ようやく待ち望んだ雨の日が来た。子どもたちは待ってましたとばかりに「やったー!」と大喜びである。カップを着て長靴を履いて傘をさして準備をすませ、雨の園庭に出た。長靴を履いている子は、水たまりに入って深さを確かめている。自分たちが育てているミニトマトの様子を見に行き、「先生、トマト、ビチャビチャになってるわ」「雨のお水飲んで、美味しいって言ってるのかな?」「そうやで、のど乾いてたから美味しいって言うてるで」と子どもたちの会話が弾んだ。色々な草木を見に行き「わーこども濡れてる、水たまりできてる!」といつもと違った園庭の様子に子どもたちは大興奮だった。一通り、園庭の様子を見て遊んだ後、保育室に戻り、一緒に振り返ってみた。「何でみんなが植えてたトマトや葉っぱが、のど乾いたってわかったん?」とたずねてみた。すると「だってずーっといい天気やって雨降らなかったから、のどがカラカラやと思ってん」という答えが出たので、保育者が「そっか〜みんなも暑くてのどが乾いたらお茶や水飲むもんね」「じゃ、今トマトや園庭の葉っぱ達はどんな気持ちなんやろ?」とたずねると、「うれしい!お腹いっぱい、ぐんぐん大きくなろうと思った」と答えが返ってきた。「じゃ、雨ばかり降ったらどうなんやろ?」と質問すると「嫌になる、お日様もいる!」「びちょびちょであかんかも」と言った。その後、部屋にある「あめふりくまのこ」の絵本を読み、お山に雨が降る様子や雨が降って小川ができ、水がちよろちよろ流れ出すという絵の風景を見ながら、園庭の雨の様子と重ねている子どもたちだっ

た。雨が降らないと草木が育たない、自分たちにとっても生活する上で大切な水ということが少しわかり、手洗いなどで水道の蛇口をギュッと閉めたり花の水やりは雨水タンクから使うなど水を大切に作る姿が見られるようになった。

= 考察 =

元々子どもたちは太陽や雨にも興味があり、普段から園庭で影遊びをしたり、靴箱の上に飾っているサンキャッチャーに太陽の光があたってキラキラする様子を見たり、カラーセロファンに光があたって、赤や青の色が廊下や部屋の窓にあたることを楽しんでた。また、雨上がりには、水たまりをジャンプしたり水を使ってままごとをしたりと天候による環境の変化を楽しむ姿が見られた。太陽と雨とのつながりは、自分たちで野菜を育てたり観察したりする中でわかってきたことである。0歳児から環境教育を受けてきた子どもたちは、自分たちで野菜や花を育てる経験を積んできており、それらと関わる中で天気に移り変わりや植物と水との関係にも興味関心を持つようになっていく。毎日水やりをする時に、野菜がぐんぐん大きくなるのを目の当たりにし、野菜には水が必要であることや水をやりすぎるとあまり良くないということも経験を通して徐々にわかっている。また、自分たちの体の仕組みと同じようにあてはめて考え、暑いとのが渴く、のが渴くと水やお茶を飲んで渴きを癒す、その行動が自分たちはうれしいと感じているから植物もうれしい気持ちになるというように、3歳児なりの素朴な理論をあてはめて推論し、共感している。また、雨がずっと野菜がなえて傷むことや太陽が野菜を生長させることも理解しており、太陽や雨が植物にも人間にも大切であると経験を通して知っている。雨の水をペットボトルに貯めて水やりにも使うことも活動の中で体験してきているので、節水にも興味を持ち始めている。天気や太陽などの自然の事象を自分の生活と結びつけて考えることは幼児には難しいと思われがちである。しかし、遊びの中で天気と自分たちの暮らしということをつないでいくことを継続すると、3歳児でも水や太陽の光の大切さを知ることができるし、雨の水を貯めて節水するなど環境に配慮した活動も自然にできるようになる。



3.4 2歳児の活動

〈薬遊び〉

9月後半、保護者から脱穀をすませたからと薬をたくさんいただいた。0歳から2歳だけが在籍する分園には自然を増やすには制限のある狭い園庭しかない。そこで、いただいた薬を園

庭に広げて遊ぶことにした。2歳児は園庭でトロ箱に田植えをして、稲刈りをした経験がある。そこで、1回目の藁遊びの時に、その稲から米を取った後の姿が藁だと伝えた。また、子どもたち自身が育てた後の藁に少し残っている稲穂もみて、自分たちが扱った稲と目の前でみている藁との関係も気づけるようにした。さらに、藁をより身近なものとして感じてもらいたいと思い、日頃からよく読ん



でいる「三匹のこぶた」のお話にからめて「三匹のこぶたのお兄ちゃんの藁のお家の藁だよ。」とも話した。本園では、そのつながりがわかるかどうかは不明であっても、保育者が大切にしたいことは低年齢児でも丁寧に伝えるようにしている。藁遊びは4月から入園した子どもたちには全く初めての経験だった。初めはどう遊べばいいのかわからず保育者の様子を見ている子どもたちが多かったが、次第に藁をつかんでみたり投げてみたりする姿が増えてきた。A児は少し藁をつまんで落として藁がパラパラ落ちる様子を楽しんでいるようだった。B児は昨年も経験しているのを覚えていたのだろうか、大胆に藁を抱えては放り投げて喜び、藁まみれになっていた。

10月のある日、2回目の藁遊びの時である。藁を広げると子どもたちからは「うわあっ！」と歓声が上がり、いつも元気で何事にも興味を示す子どもたち数名が藁の上に登った。いつもと違う足の感触や少し高くなった感じが楽しい様子だった。そこへ、藁遊びを楽しそうだと感じたのかA児が自ら近づいてきて、他の子どもたちが遊んでいるそのすぐ横で藁の上にゴロンと横になり、空を眺め始めた。A児は初めてのことや新しいことには自分から加わりとう



することが少ないので、保育者はその姿がうれしく、A児に藁を上からかけてみた。それでもA児はじっと空を眺めていた。そこで、保育者がその横に仰向けに寝転んでみると、A児はニコッと笑顔になり保育者を見た。すると、今度は他の子どもたちがA児と保育者の上に藁をどんどんかけ始め、藁布団のようになってしまった。藁を広げながらパラパラ落とす子、「わあっ！」と上に放り投げる子、それぞれが自分なりに楽しんでいる様子だった。

その後、ある子どもの腰に藁を束ねて巻こうとしている保育者の様子を見ていたB児が「Bもして〜！」とやってきた。B児は何事にも興味を示し想像力が豊かで活発な

子だ。B 児は腰に藁を巻くと、少し自慢げで、少し恥ずかしそうな表情だった。その B 児の視線に、別の保育者が藁を束ねて子どもの頭に乗せている姿が飛び込んだ。途端にその保育者の傍まで行き「B もして～」と今度は藁を頭に乗せてもらい、うれしそうに友だちに見せていた。しばらく藁ファッションを楽しんだ後、B 児は 1 回目の藁遊びでもした「三匹のこぶたごっこしよう！」と保育者を誘いに来た。保育者がクラスでよく歌っていた三匹のこぶたの手遊び歌を歌い始めると、全員参加のごっこ遊びが始まった。この歌は三匹のこぶたたちそれぞれが家を作り始めるところからオオカミが煙突から落っこちて、やけどするまでのストーリー一仕立てになっている。その中でも藁の家が吹き飛ばされる場面の歌を何度も歌いながらみんなでごっこ遊びを楽しんだ。B 児は入室後、保育者に「三匹のこぶたごっこは楽しいな！」と満足そうに話し、藁遊びを存分に堪能した様子だった。

= 考察 =

春に比べると、自分の気持ちや考えていることを言葉で表現することができるようになっていく。一人が歌い始めるといつの間にか全員での合唱になっていたり、砂遊びからお出かけごっこが始まり、おばけごっこが始まったりするなど、自分たちで遊びを見つけたり考えたりすることがうまくなってきている。そこで、自然素材そのままの藁を目の前にするとどんな遊びを生み出すのだろうと保育者には興味と期待があった。

1 回目は初めてたくさんみる藁を嫌がったり、触れることに躊躇したりする子どももいたが、2 回目になると慣れた様子があり、解放感があるようで投げたり座ったり寝転んだり、藁を使って変身してみたりと一人一人が自分の遊び方で遊ぶことができた。同じ素材であっても経験を繰り返すことで、子どもはより豊かに遊びを生み出すことができるようだ。例えば、この事例の A 児は普段の消極的な姿と違い、藁には興味を示し、自分から遊び出す積極的な姿が見られた。また、三匹のこぶたごっこが始まったのは 1 度目の藁遊びの時に「三匹のこぶたのお兄ちゃんの藁のお家の藁だよ。」と話したことを B 児が覚えていたことがきっかけである。一人の子どもがそれを覚えていたことから、素材遊びだけでなく、他の子どもも巻き込んでお話の世界へとつながり、ごっこ遊びに発展していった。想像力を働かせて知っているお話の世界を再現したり、吹き飛ばされた藁はどんな飛び方をするのか実際に経験したりして遊ぶことができた。素材遊びのよさは、想像力や創造力を駆使し、また、発想力を使って遊び方を工夫し発展させられることである。自然物はその素材として適しており、藁は日本人にとって人の生活と自然の結びつきを経験するのに最適である。本園では 2 歳児も稲作を経験しており、毎日食べているご飯との関係も伝えてある。藁は稲作の副産物であり、古来から様々な用具、道具へと加工されてきた。そうした自然素材を用いた文化は既に多くが失われてしまっているが、それらは想像力や発想力などの人間の持つ能力が働いて工夫され、維持されてきたのである。子どもがそうした自然素材を使った遊びを繰り返し体験する過程で、そうした力の育

ちにつながるのではないだろうか。

3.5 1 歳児の活動

〈園庭遊び〉

4 月、親と離れて初めて過ごす園生活に慣れずに泣いていた新入園児たちだったが、園庭に出ると泣き止み、遊具の滑り台をすべったり、乳児用三輪車に乗ったり、砂場でカップに砂を入れて遊んだりしているうちに、少しずつ自分の安心できる居場所を持てるようになる。園庭には水辺のビオトープがあるが、始めの頃は池に近づく新入園児はほとんどいなかった。そんな子どもたちの居場所も次第に広がり、園庭を探索するようになってきた。春には桜の花びらを見つけて拾い「先生、あった!」と見せに来たり、夏には「水やりする」と言ってみディトマトやピーマンの世話をしたり、秋には水たまりの中へ長靴でダイナミックに入って遊んだり、入れ物にたくさんのドングリを拾って集めたりと、子どもによっても季節によっても興味のあることは様々である。



水たまり遊びやドングリ探しに飽きた頃、ようやくビオトープの水辺へと興味が移ってきた。11 月のある日、S 児が小川の橋を渡ろうと挑戦していた。こわそうに保育者の方へ手を伸ばしてはいるが、それでも一人でゆっくりと足を前に出している。保育者は届きそうで届かない距離を保ちながらいつでも捕まれるよう手を伸ばしていたが、結局 S 児は保育者の手を持たずに初めて橋を渡ることができた。「S ちゃん、渡れたね!」と言うと「やったー!」と大喜びした。次は一人で渡りに来て、ゆっくりだが渡ることができ、その後もうれしくて何度も何度も繰り返し渡っていた。それを見た他の子どもも「やる!」とやって来て渡ろうとした。二人の子どもはゆっくりだが渡ることができ一緒に喜んだが、別の子どもはまだこわいようで、四つん這いになって渡った。ところが、T 児がこわくて途中で止まってしまったので、どうするのかと見てみると、最初に渡った S 児が手を伸ばして助けようとした。しかし、S 児の手は届かず、T 児もこわくて動けない。すると S 児の次に渡った Y 児が橋の途中まで助けに行き、T 児の手をつないだまま、後ろ向きで進んでいった。二人とも橋を渡り終わると手をあげて喜んだ。

S 児が橋を渡ったことをきっかけに他の子どもも橋を渡るようになり、小川や池をのぞくようになった。小川の草むらでは 4 歳児がバッタを見つけ、J 児に「ほら、バッタやで」と教え



てくれた。それから、毎日のようにJ児は「バッタ！」と言って草むらを探すようになった。そして、J児のところへF児がやって来て二人でバッタを探しているついに自分たちで茶色いバッタを見つけることができた。二人でしばらくじっとバッタを見つめていると、バッタが小川に落ちてもがき始めた。すると、F児は「バッタさん、イヤイヤっていつてる。」とそっとバッタを持ち上げ

て、草むらに置いた。保育者がF児に「バッタさん水から出られて良かったね。どうしてここに置いてあげたの？」とたずねると「ここ（草むら）、バッタさんのお家！」と答えた。「じゃあ、バッタさんは何を食べるの？」とさらに聞いてみるとJ児は「葉っぱ！」と答えてくれた。

12月に入り寒くなると、小川に氷が張り、橋を渡って氷を触りに行く子どもが出てきた。J児とF児は水を触らずよく小川をのぞいていた。「何してるの？」と聞くとJ児はボソッと「バッタさん、いてない」とつぶやいた。F児は「バッタさんお水にはまってたなあ。Fくん、よいしょってこうやって取ってあげた。」とつまむ真似をしながら話してくれた。保育者は以前バッタを助けたことをF児が鮮明に覚えていたことに驚きながらも「前に小川にはまったバッタさんを助けてあげたね。でも、バッタさんいなくなってるね。どこに行ったのかな？」とたずねてみた。すると、F児が「土！」と答えた。「土の中？」と聞き返すと「カブトムシさんも土やなあ。」と保育室で飼育しているカブトムシの幼虫を思い出したようで、F児は「カブトムシさん、ねんねしてるなあ。バッタさんもねんねしてる。」と言い出した。保育者もその場では「バッタさんもねんねしてるかな」とF児の思いに寄り添うことにした。

=考察=

最初はビオトープに全然興味を示さなかった子どもたちが、少しずつ活動を広げ、友だちとの関わりを通して興味を持ち始めた。春から秋にかけて季節の移り変わりと共に様々な経験することによって、興味や関心が高まっている。一人でうまく橋を渡れなかったS児が初めて自分で渡ることができた時のうれしさが友だちにも伝わり、自分もできるようになりたいと思うだけでなく、仲間が渡れたことを自分も喜べるようになっていく。また、場所に慣れると、今度はその場所にある生物にも関心が行くようになった。そして、季節の変化と共にバッタがいなくなったことにも気づき、自分たちが保育室内で育てているカブトムシの生態を思い出し、バッタにあてはめて考えることができるようになっていく。

この事例から、まず、人間関係の中で子どもの環境への興味や関心が育つということが確認

できる。仲間がしていることを自分もしてみたいという意欲が生まれ、応援したり、助けたりすることがさらに意欲を伸ばす。既に1歳児で仲間意識が育っていることや年長児の影響で生物への関心が高まることがわかる。自分より先に何かを成し遂げた仲間や年長児への憧れもあり、それが意欲につながっていく。また、1歳児でも自分が経験を通して学んだ素朴な知識を他の種類の昆虫にあてはめて推論できることがわかる。しかも、1歳児なりに自分で想像し、考えて、しっかり答えることができた。こうした推論がなされるのは、日々の飼育経験の中で知識がしっかりと得られているからであり、カブトムシとバッタが類似の生物であるという正しい判断ができていているからである。この場面では冬の間、バッタは土の中で寝ているという子どもの考えを保育者はそのまま受け止めている。実際には卵で冬越しをするバッタが多いが、そうした知識は保育室で絵本を読む機会などを通して子どもが自分で得ることができるようにし、実際のビオトープでは正しい教科書的知識の伝授ではなく、子どもの観察と推論を評価し、共感するようにしている。そして、この事例では共感の育ちも確認できる。橋を渡るのがこわいと思った友だちを助けようとしたり、友だちの成功と一緒に喜んだりできている。さらに、友だちと一緒に虫を探して「虫も生きている」「人と同じように水に落ちたらかわいそう」という気持ちからバッタを助けようとする姿もあり、バッタに対する共感が育っている。人間ではない異なる種であるバッタにそうした思いを示すことができる背景には、それまで友だちを大切にしよう援助したり、保育室内でカブトムシを慈しんで育てる姿を見せ続けた保育者の努力があり、そうした日々の経験や保育者の姿をみることから子どもは友だちや命あるものに思いやりを示すことを学んでいる。

以上のことから日々の一つ一つの経験が、一人一人の子どもの成長へとつながっているといえるだろう。1歳児であっても同年齢の友だちや異年齢の仲間、保育者から多くを学び、吸収している。水たまり遊びやドングリ探し、橋渡り、虫探しなど多様な遊びを提供してくれる園庭環境の中で仲間と一緒に毎日同じ遊びを継続して遊び込むことで「遊びきった」という達成感を持ち、次の遊びへと挑戦することができる。こうした子どもたちの遊べる環境を保証しながら、自らで考え遊ぶ力を伸ばしていく必要がある。

3.6 0歳児

〈苗植えを通して〉

こども園での生活が始まり半年程経った9月頃、子どもたちと園庭に出ると、2歳児がキャベツとハクサイの苗を植えていた。保育者自身が苗植えに興味を持つと0歳の子どもはどのような反応をするのかと思い、保育者は苗植えの説明を聞いている2歳児の横に座ってみることにした。すると、砂場に行こうとしていた3人が、保育者が自分たちと一緒にいかずに2歳児たちと座っているのに気づき、立ち止まった。そのうちM児（1歳4ヶ月）が砂場に行くの

を止め、少しずつ近寄ってきて、保育者の横に座った。まるで、一緒に説明を聞いているかのような様子だった。説明が終わると M 児が保育者の顔をのぞき込んだので、保育者はハクサイとキャベツの苗を手にとって見せることにした。M 児が苗のポットを下からのぞいたり触ったりしていたので「M ちゃん、葉っぱがザラザラしているのがハクサイ、葉っぱがツルツルしているのがキャベツだよ」と



葉を保育者が親指と人差し指で挟み、まだわからないと思いながらも違いを確かめながら伝えた。M 児も自分の指で葉の違いを確かめるように、ゆっくりと葉を触った。ハクサイの葉とキャベツの葉を交互に触り、ハクサイの葉を触った時には一瞬目を大きく見開いて保育者の方を見たので、葉のザラザラした感触に気付いたようだ。その様子を見て砂場に行こうとしていた R 児（1 歳 5 か月）も寄ってきて M 児と一緒に葉に触り始めた。始めは感触を楽しんでいる様子だったが、だんだんと葉を強く触ったので葉がちぎれてしまった。R 児はちぎれた葉を見てとても驚いたので、「R ちゃん、葉っぱちぎれちゃったね。ちぎれた葉っぱ痛かっただろうね。よしよししてあげようか。」と言いながら、保育者は両手で優しく触ってみせた。すると、片手で触っていた R 児が、保育者と同じように両手で優しく触り始めた。M 児と R 児が葉っぱを楽しそうに触っている様子を見たのか、今度は S 児（1 歳 4 ヶ月）もプランターに近づいて来たが、興味がなさそうにみえたので「S くんも一緒に葉っぱ触ってみない」と誘ってみた。「優しく、そっと触ってあげてね」と言うと、S 児は「うんうん」とうなずき、「優しく」と伝えたいかのように自分の鼻の前に人差し指を持ってきて「シーッ」というしぐさをした。保育者が触っていると少しずつ興味がわいてきたのか、葉っぱを触りながらニコニコし始めた。すると、そこにアカトンボがやってきた。保育者は「あっ。見てみて。アカトンボさん来たね」とアカトンボを指差した。子どもたちはアカトンボを見つけると、声をあげて喜んだ。「もっと近くに来てくれたらいいのにね」と話していると、アカトンボはまわりを一周してから、飛んで行ってしまった。「アカトンボも苗植えの見学に来てくれたのかな。良かったね。」と声をかけると M 児は同意するかのように首を横に傾けた。

= 考察 =

5 月に保育者が子どもたちの前で夏野菜の種まきをした時には、保育者がしていることより園庭で他の子どもが遊んでいるボールの方に興味があったが、9 月のこの事例では、子どもは保育者のしていることに興味を持つようになっていた。0 歳児は月齢が上がるにつれ、運動能力・感情表現・好奇心等が発達していく。9 月頃には、日々の生活で保育者の行動を真似する

様子が見られるようになっていたので、ここで保育者はあえて子どもたちがしようとしていたこととは異なる行動を取ってみた。0歳児は自ら言葉で表現することは難しいが、表情の変化等から何を感じているかを読み取ることができる。子どもたちがハクサイとキャベツの葉の違いを理解できたかどうかはわからないが、何かを感じ取った様子は見られた。また、R児はまさか葉がちぎれるとは思っていなかったようで、葉がちぎれたのを見てびっくりし、葉を元に戻そうとする行動をみせた。自分が力を入れすぎたことで本来ある姿から変えてしまったことに気づき、また、元の姿である方がよいと判断したから元に戻そうとしたことになる。命あるものだからという判断ではないだろうが、まわりにいる保育者や上のクラスの子どもが大切に扱っている姿を見てそのように反応したのかもしれない。0歳児クラスの子どもであっても、そうした経験を積み重ねることで命あるものを大切にすることを学んでいくのではないだろうか。入園当初はボールのような動くものにしか興味を示さなかった子どもたちが秋には植物にも興味を示すようになってきている。また、保育者が働きかけることで、様々なことに関心を持つようになり、また、自分が感じたことを身体や表情で表現するようになってくる。0歳児クラスの子どもにはまだわからないと決めつけることなく、植物や動物に触れる機会を持ち続けて子どもの知的好奇心を刺激して関心を広げ、保育者がそれらに丁寧に関わる姿を見せることで命あるものを大切にする態度を育てていくことが重要である。

4. 係活動

4.1 稲作係

本園では環境教育に取り組む以前から「稲作」を実践に取り入れていたが、現在は環境教育と食育の目的を重ねて栽培している。今年度は保育者の係活動の一つに稲作係を作り、子どもたちがより細かく観察したり、生育の様子や子どもたちの関わりを保護者に知らせたりするようにし、その活動を充実させることにした。稲作は5歳児が中心になって行うため、5歳児の担任とフリーの保育者が担当した。子どもにお米ができる過程の観察や体験をしてもらうための準備だけでなく、保護者にも関心を高めてもらうためのポスターを作り、玄関ホールに貼り出した。園には田んぼがないため、粳を苗の育成トレイで育て、菜園の大きなプラスチック桶に苗を植えて育てている。

今年は保護者からいただいた種粳を使った。種粳の品種が早稲だったので、4月に粳蒔きをし、5歳児の子どもたちが当番（一定の子どもだけが関わるのではなく全員が関われるように順番にしている）を決め、発芽するまで土が乾かないように水の管理をした。GWなどの休日で水やりが困難なこともあるので、木枠にビニールシートを敷いて水を張り、育成トレイを浮かべる方法で水の管理をした。当番の子どもたちは、毎朝育成トレイを見に行き土の乾き具合



を見てトレイの印まで水を入れる活動をした。そして、6月に丈夫な苗を選びプラスチック桶に田植えをした。株分けの様子も観察できるようにと、小さなバケツに1本苗や2本苗も植えた。8月には、花が咲いて実り始め、スズメが穂を食べ始めたので、網を張り米を守ることにした。本来は成熟してきた頃に水を抜くとよいが、本年度は雨の日が多く、桶で育てているため収穫まで水が入った状態が続いた。9月に子どもたちと稲刈りをした。収穫後の桶は片付けず、そこに残った稲株からは10月中旬に芽が出てきた。それをみて子どもたちは「また、お米できてる」「すごいね」と切り取った後に芽が出てきていることに驚き、新たな芽が稲株のどこから出ているかを観察していた。10月に、子どもたちは稲穂から粃を取る脱穀をし、自由遊びの時間などに交替でビンの中に粃を入れ、木の棒で粃を混ぜて粃どうしを擦り合わせて粃殻を取る臼引きをして玄米にし、ランチの時に白米と一緒に炊飯して食べた。藁は保護者からいただいた藁と一緒にして、緑育の会で保護者に作っていただいたすのこ機を使って子どもたちがこもを作り、12月に園庭の木にこも巻きをした。「堺自然ふれあいの森」への秋の遠足でこも巻きをする意味を聞いて経験した5歳児が中心になり、どの木に巻くかを考え、遠足の経験を活かし、「押さえておくわ」「紐を回して」「引っ張って堅結びしてね」と分担して活動した。

粃時きから炊飯して食べる過程までがわかるように「稲作ニュース」を第6号まで作り、玄関ホールに掲示した。また、園にあった本だけではなく、図書館で借りたり、保育者が家から持ってきた「ごはんだいすき」「田んぼの学校」「田んぼの一年」「につぼんの里遊び入門、田んぼで遊ぼう」などの本を子どもたちが読んだり調べたりできるように保育室に置くようにし、作業する時は持ち出して、その場でみることができるようにした。

子どもたちは水の管理をしたり、自分たちの観察結果をクラスで発表したりし、稲を育てる一連の過程をそれなりに経験することができた。また、他の年齢の子どもたちも5歳児が活動している姿を横で見たり、菜園に行った時に育ってきた稲を見たり、保育者から話を聞いたりして稲作の様子をみる機会を作るようにしてきた。田んぼがないため桶やバケツでの稲作に

なっていることはやむをえないものの、田植え時期の田土の感触を知ったり、現れた動物の観察や水を引いて水田に水を張るなどの活動までには及ばなかった。桶で育てる方法を工夫し、動物の観察や稲作の様々な過程にもっと関心を持てるようにしていきたい。

4.2 エコ・マネジメント係

エコ・マネジメント委員で「園生活でみんなができるエコ活動をしよう！」というテーマのもと、0～5歳児の子どもが生活の中で継続してできるエコ活動を考えて提案し、クラスごとに実践した。その内容は、「①水道の蛇口は使ったらしめる、②人のいない部屋の電気を消す（保育者）、③プラゴミと燃えるゴミはそれぞれのゴミ箱に分けて入れる、④水やりや遊びには雨水タンクの水を使う、⑤おやつで飲んだ後の牛乳パックをリサイクルボックスに入れる」の5つの活動である。その結果を毎月クラスごとに振り返り、チェックするようにした。

5つのエコ活動をするにあたり、①については4歳児クラスで「もったいないばあさん」「しずくのぼうけん」「みずからの伝言」の絵本を読み、水の大切さを知らせていき、水道を使ったら蛇口をしめることを意識できるようにしていった。その結果、「早く水を止めないともったいないで！」と子ども同士で教え合う姿が見られるようになってきた。②については、保育者一人一人が意識して電気を消すようにし、保護者にも声をかけ協力してもらうようにしていった。これも次第に習慣づいて、無駄な電気を使わないようになってきている。③については、本園では各保育室にプラゴミと普通のゴミの両方のゴミ箱を置いて分別を習慣づけているので、0、1歳児は保育者と一緒にゴミを捨て、2歳児ぐらいになると、「これはプラゴミ？」「これは普通のゴミ？」と子ども自身で意識して分別できるようになっている。5歳児クラスでは、ゴミ拾い散歩に行くことで、プラゴミ以外にもゴミの種類があることに気づき、リサイクルに関しても興味を持ち始める。④については、園庭に置いている雨水タンクには、水やりや水遊びをするほど雨水がたまらず、あまり利用できなかったという意見があり、「水タンク」と呼び名を変え、雨水がたまっていない時はあらかじめ水道水を溜めておき、水タンクにある決まった水だけを使うようにした。そうすると水タンクに入っている限りある水を大切に使う遊ぶ姿が見られるようになってきた。⑤については、新しい取り組みを始めた。本園では牛乳を飲む際3～5歳児はビン入りのものを、0～2歳児はパック牛乳を使っている。今までは保育者が牛乳パックを洗って開き、5歳児がリサイクルに持って行っていたが、今年から、0～2歳児がおやつで飲んだ後の牛乳パックを毎日保育者が集めて、2歳児全員が交替して洗って干す活動をし、それを3、4歳児が切り開き、5歳児がリサイクルボックスに入れに行くという活動を行うようにしている。日々の生活の中でできるものはリサイクルする・そのための手間をかけるということが当たり前のように根付くことが重要である。園全体のリサイクル活動として定着してきた。

また、エコ・マネジメント係は、前年度までの数年間、企業等の環境方針を調べてきたことをふまえ、法人における「環境方針」の案をようやく検討した。保育理念とは別途に策定することで環境に関する基本理念の実現を目指すことができる。来年度からは法人の管理運営、教育保育活動、社会への発信をより具体化し、持続可能性のための保育を行えるよう、保育内容や行事を見直し、環境方針に従った教育・保育ができるようにしていく予定である。

4.3 園庭係

ビオトープを造り出して3年目に入り、今年度から「園庭係」ができた。主な活動はビオトープの維持管理、植物の管理、園庭の緑化、自然遊びを誘発するための工夫などである。この3年で色々な虫や鳥がやって来たり、植物が生え変わったりして、年間を通して季節の変化を感じられる場所になった。今年度はさらに緑地が増えるように花や野菜の終わったプランターの土をそのまま木のまわ



りに置くことで雑草地が増え、それにより子どもの導線も変わってきた。近年、平坦地の動きしか経験のない子どもが多くなり、本来人間が持っている様々な運動機能や身体感覚の発達が損なわれている。そこで、園庭に起伏をつけ、複雑な地形を作ることで、平坦地を動くだけでは得られないバランス感覚や敏捷性を育てられるようにした。以上のような園庭環境の改善により、子どもたちが遊びの中で様々な身体機能を発達させる場、様々なことに気づき、自分の力で考え発見できる場となっている。さらに、動物や植物に触れて生活する中で、生物に対する共感を育んでほしいと思い、保育者が色々な方法で伝えていった。例えば、「水辺で貝を見つけたらどうするか」と問いかけ、子どもたちの意見に共感したり、貝の気持ちになって一緒に考えたりした。また、「木から葉っぱを取ってしまったらどうなるか、花は何のために咲いているのか、ずっと咲いてくれるためにはどうしたらいいのか」や「動物や植物が元気に暮らせるためにはどうしたらいいのか」を聞いたところ、実際に触って感じ、「生き物や植物も人間と一緒にだから」という意見も聞いた。とはいいいながら、子どもの遊びを制限してはならない。何も考えずに木の枝を折ったり、植物を踏み倒すのはよくないが、虫を捕まえようとして草を踏んでしまったり、池や小川にはまったりするのは起こってしまうことなので、動物や植物に対する思いやりの気持ちを忘れなければよいということも伝えた。そのような日々の関わりから、子どもたちはバッタやダンゴムシなどを捕まえても観察したらすぐに逃がし、草花遊びをするためにオシロイバナやエノコログサなどの草花を取っても遊んだ後は土に戻すという

姿が自然と見られるようになった。また、地域の自然を取り入れ園庭の緑化を図るために草取り散歩に出かけ、子どもたちの手で採取した草を水辺の周りに植えることで植物に対する興味が深まってきている。

さらに、今年度から「緑育の会」を6月と12月に開き、保護者の方や地域の方、子どもたちと共にビオトープを育成し、子どもが自然と遊ぶ環境を育むことにした。6月の会では垣根や苗木を保護する三脚、すのこ機作りなど、12月の会では丸太橋の修理や竹のフェンス作り、竹の玩具作りなどを行った。その結果、できあがった垣根に花を飾ったり、ごっこ遊びやかくれんぼをしたり、子ども



もたちの園庭での遊びが広がってきた。このように保護者の方と共に園庭環境を豊かにしていくことで、子どもたちも自分の身近な家族が育成に関わっていることを誇りに思い、より親しみを持つようになる。当日関わった子どもはより園庭環境についての関心や知識が高まっていく。園庭環境が豊かになることで自主的に遊びを見つけ、自分で考えて遊んだり、自然への関わり方を考えたりするようになる。また、保護者も遊びの環境を豊かにする当事者として関わっていただくことで園の保育への理解や関心が高まる効果があると考ええる。

4.4 カリキュラム・マネジメント係

カリキュラム・マネジメントは2017年改訂の幼保連携型認定こども園教育・保育要領だけでなく、同時に改訂された学習指導要領や幼稚園教育要領という日本の教育に関わるすべてのガイドラインに初めて記載されたものである。具体的にどのように実施していくかは手探りであるが、本園では今までも保育課程係が中心となって保育の実態や全保育者の意見を把握しながら保育課程や指導計画を環境教育の観点から毎年見直すという作業を継続してきた。そこで、環境教育も含め、子どもたちの育ちが豊かになるようによりよい保育を常に考え続けることがカリキュラム・マネジメントであるにとらえ、保育課程係をカリキュラム・マネジメント係に名称を変更し、園の保育全体を考えていくことにした。

今年度のカリキュラム・マネジメント係は園長と昨年度も担当した5歳児担任、1歳児の担任及び分園のリーダー保育者1名の計4名が担当した。まず、今年度の環境教育年間計画が「実際に沿っているか」「食育計画とうまく連携しているか」を振り返った。また、後半は各クラスの指導計画が達成されているかを確認することで、年間計画に沿った活動がなされているかどうか担任が意識するよう促したことで、各時期に経験してもらいたい活動がもれることな



く進むようになっていった。実施できなかった項目を振り返ってみると、計画に組み込まれているが現実に活動することが困難であった。例えば、5歳児の年間計画に入っている「雨水を溜める」活動では、子どもたちと雨水がたまりそうな場所を考えバケツを置いたが、梅雨の時期に雨があまり降らず、全体的に雨の日が少なく、なかなかたまらなかった。係で話し合い、雨水が流れるように樋を

取り付ける方法はどうかと考えているが、取り付ける場所の問題もあり、次年度の課題といえる。また、昨年度は「ツマグロヒョウモンの幼虫を探す」を年間計画に入れていたが、今年度はツマグロヒョウモンに限らず「虫の幼虫を探す」に変えてみた。その結果、観察の幅が広がり、子どもたちの発見が増えたように思われる。昨年度の反省を活かして、年間計画をとらえ直すことで実現されたことが多くなり、各担任の意識が高まったと考えられる。また、菜園係や担任が必要な調整を行うようにしたことにより実践しやすくなった場面もあった。そして、食育計画が環境教育の年間計画と整合性がとれているのかどうかを振り返り、季節や生活にあった内容かどうかを確認すると一致しないものもあり、食育計画で旬でない5月に設定されていたリンゴの皮むきを秋の終わり頃へと変更した。また、クッキングの計画も、例えば、2歳児2月のクッキングで「キャベツの葉を剥がしてちぎる」という計画だったがキャベツをハクサイに修正した。2歳児は春もキャベツを使って同様の活動を行うことがあるので季節感も考慮しての変更である。このように環境教育の年間計画を細かく確認しながら話し合いの場を設け、子どもたちにとって最善の保育内容に近づけるよう努力している。

園の活動全体に関わる教育保育課程については、環境教育の欄に記載されている項目は具体的に実践されていることが確認できた。しかし、他の項目を確認していくと子どもも保育者も忙しい課程になっていることが課題だとわかった。本園では、園の行事は日本の文化を体験するという意味で重要ととらえながらも、子どもが主体的に遊びに没頭し育つ時間が行事を目的として削減されるのは望ましくないという考えの下、行事に向けての準備は日頃の活動の中で無理なく実施することが望ましいと考えている。それでも、多様な行事が計画には組み込まれており、結果として子どもも保育者も忙しい現状がある。そこで、行事の必要性や行事への取り組み方の検討を開始した。課程全体を一度に見直していくことは無理があるので、次年度以降、一つずつ検討していく予定である。

4.5 玄関ホール係

今年から玄関ホール係が、子どもが保護者と共に登園・降園するときに必ず通る玄関ホールの環境を整えることになった。まず、二十四節気について子どもや保護者に分かりやすく書いたポスターを作り、季節のテーブルの近くに貼り出した。古くからある二十四節気を取り上げ、季節を大切にする意識が育つようポスターを掲示し、園庭遊びや散歩の時にも季節や自然について関連付けたことを話すようにした。ポスターは、子どもにわかりやすく書くこと、季節の植物や旬の食材等の写真を入れるなど工夫した。子どもたちはまず写真の動物や植物に興味を示し、何かが書いてあるのだろうと掲示物を読む姿が見られた。担当する保育者も立春や夏至、冬至などの代表的な名称は知っていても、二十四節気についてはほとんど知らない状態からのスタートであった。環境ボードを作るうちに二十四節気を意識するようになり、知識も深まったが、ほぼ2週間で変わる節気の変化を子どもに分かりやすく表現したり、節気の旬のものを選ぶことが大変だった。例えば、参考にした本では子どもがよく知っているみかんが節気では11月の小雪頃となっていたが、実際は立春頃まで長い期間市場に出まわっているのも、いつの節気の果物としてあげればよいか悩んだ。

子どもたちが二十四節気を十分に理解できることはないが、玄関ホールに掲示することによって、保護者も読み、「今日は○○なんだって。」と子どもに話している姿も見られ、家庭でも話題にしているようだった。最近はハロウィンやクリスマスなど西洋から輸入された本来の趣旨とかけ離れたイベント的な行事が重視される傾向にあるが、季節を愛でるという日本の風土を理解した先達たちが大切にしてきたものを子どものうちから自然に吸収して成長し、結果として様々な自然の変化から季節の変化を感じ取れるような感性や季節の変化を大切にする心が持てるようになればと期待している。例えば、何気なくみたニュースで「今日は夏至です。」ということが紹介されたら、「夏至って知ってるよ。お昼の時間が一番長い日だ。」とか「夏本番だ。」というような言葉がでてくれば成果があったといえるのではないだろうか。環境教育を取り組むにあたり、日本の風土、四季、風習、自然の恵みに感謝し敬う心が、二十四節気を紹介することでさらに深まってほしいと考える。

季節のテーブルは、去年の保護者 PR 係が行ってきたように旬の果物や草花を飾った。園庭や街でよく見かける植物を取り上げ、子どもたちにも意識づけができるようアジサイやキンモクセイ、エノコログサなど季節のものを飾った。実際に触れることができるため、子どもたちも興味を示して触ったり、匂いを嗅いだりする姿が見られ「これはなんだろう」「この花の名前は?」「匂いは?」など見たり触ったりした。保育者も園庭遊びのときにはテーブルに展示してある植物と同じものがある場合は、子どもたちが気づくよう働きかけた。保護者も送迎時に見ておられる姿がある。特に、「自分たちで触ったり匂ったりできるもの（キンモクセイやカキ、貝殻など）への関心は高く、自分たちで置いている位置を変えたり、実を取ったりして

いた。しかし、ただ飾っているだけの花（アジサイ、フキノトウなど）はあまり興味を引かなかった。幼児期の子どもは自分を取り巻く世界への関心が高く、一つ一つの経験が育ちにつながりやすい時期なので、玄関ホール環境は子どもの目に留まりやすく、関心を引きやすく、かつ、実際に触ることができるものを取り入れる工夫が必要と考える。

4.6 菜園係

昨年度に引き続き、菜園で季節ごとの野菜を栽培し、収穫した後クッキングに使用した。菜園係はその準備や担任との連絡調整などを行う。特に今年度はエンドウがよく実り豊作だった。2歳児の時に種をまいたエンドウは、同じ子どもが3歳児になった春に立派に育ち、たくさん収穫できたので子どもたちもとても喜んだ。クッキング活動としてエンドウの鞘むきを行い、その日のおやつはエンドウ豆ごはんのおにぎりとなり、どのクラスにも好評だった。しかし、エンドウは連作を嫌う作物で、昨年度と同じ畝に植えることができないので、秋には来年のために畝を新たに2つ作り、連作を嫌う野菜でも育つ環境を整えた。今年の2歳児もエンドウの種を畝に植え、水やりなどの世話をしながら、来年の春に収穫できることを楽しみにしている。エンドウのように学年をまたいで種まきと収穫がある野菜は、下の学年で種まきして育て、新しい学年で収穫することになるが、子どもたちにとっても新たな学年で一つ大きくなったという自覚の下で、前の学年で自分たちのしたことを振り返るよい機会ともなる。このような栽培体験は2学年の指導計画の中に位置づけておかななくてはならず、担任やカリキュラム・マネジメント係と連絡を取り合いながらの作業となる。

新しく畝を作る際には、焼き芋大会で使用した炭や灰を畝に混ぜ込んだ。炭には、微生物を定着させる効果があり、保水効果や殺菌効果なども期待できるというので、炭や灰を廃棄せずに利用することができた。また、野菜の育ちは土の良さに比例することが長年の実践の経験からわかってきたので、コンポストにできた土を定期的に混ぜて管理した。コンポストには子どもが必ず何らかの形で関われるようにしており、4・5歳児では係活動のなかに菜園係があり、調理室でできる野菜のくずを入れたり、コンポストの状態を見て混ぜたりしている。1・2歳児は朝のおやつのお菓子の皮を入れて行ってコンポストの中を見て、そこに生息しているダンゴムシやミミズなどが生ゴミを分解していく過程を観察する。乳児だと「中に虫さんが住んでるね」と虫に注目するが、幼児になると虫の生息する意味や役割まで理解できるようになってくる。コンポストの管理作業としては昨年度作ったコンポストの中の状態を表した標示が消えていたため、新たに作成した。コンポストの表示には「ここに入れてください」「ここにいないでください」と文字で記入したのち、文字の読めない低年齢児にもわかるよう「○」「×」という印も表示に組み込んである。定期的に土をかき混ぜながら中の状態を確認してそれらの表示を変え、その時期に応じて生ゴミの量を管理している。

菜園は100坪ほどあり、畑だけではなく、稲作の桶やコンポストがあり、植物もたくさん植えている。菜園では野菜を植えている畑の作業をするだけでなく、稲作やコンポストをみたり、植物で遊んだり、様々な遊びができる。学年ごとに担当する野菜の世話をしたり、5歳児が稲作の管理をするために定期的に菜園に行くが、それ以外にも色々な学年がコンポストを利用したり外遊びの場として活用したりする。2歳児を例にあげると、菜園に入ればまず落ち葉集めが始まり、大きな落ち葉、小さな落ち葉の様々な形の落ち葉を集め保育者のところに来る。そして、「おばけ作って!」という声に応えて、保育者が落ち葉に目や口の穴を開けて返すと、「おばけだぞ〜!」と落ち葉を顔に近づけておばけに変身し、追いかけて遊ぶ。こうした自然物を使って子どもたち自ら遊びを見つけ、遊びを共有し、保育者の仲介なしで遊びが展開されていくことが増えてきている。これも、日々、園庭や菜園で自然物に触れ遊ぶ経験を蓄積しているからであろう。今後も菜園が子どもたちにとって遊びの宝庫となることを目指して、畑やコンポストの管理を行い、よりよい環境づくりに努めていきたい。

5. 保育者の育成

保育者の入れ替わりは例年の課題である。実践研究を開始した初年度からすると継続して残っている正規職員は2名だけであり、少しずつ職員が入れ替わりながらこの実践研究は8年目を迎えた。今年度の目標は「保育者集団のレベル維持」と「保育者のビオトープに対する意識向上」とし、保育者が意識しながら取り組んできた。昨年度から開始したビオトープ施工管理の専門家と一緒に行う少人数での定期勉強会は継続しており、一人の保育者が年間数回は勉強会に参加できるようにしてきた。今年度は、園庭での実際の子どもの遊びの様子を見ながら勉強会を行う中で、「保育者がビオトープでの子どもの動きを制止することが多い。転んだり、子ども同士のトラブルがあった場合に、どうして放っておかないの?」という指摘をいただいた。子どもが草むらや水辺で遊んでいて転んだり、池の水に足が使ったりしそうになった時、橋で衝突しそうになった時に「危ない」と思って手を差し伸べてしまったり、子どもが自分で解決する前に仲立に入ったりする保育者がほとんどであった。子どもがそういう場面を体験した時に「自己解決ができる力をつけることが大切ではないか? 転んでも自分で立ち上がろうとしているかもしれないよ。」という助言をいただき、職員で話し合った。「転ぶのがわかっていて放っておけない」「転んだ子に手を貸さず見守るだけでよいのか? 保護者が見たらどう思うか」「これは危険と思う以外は、子どもの主体性を伸ばすには見守ることが必要ではないか」「子どもが危険を察知する力を育てることも大事なことから、その場の状況で見守るか、援助するか判断能力を保育者もしっかり持たないといけない」「保護者にはその時の状況を丁寧に伝え、子ども自身でこんなことができたんですよ。すごいことですよ。と伝えては?」

など様々な意見が出た。そうした話し合いをした結果、放置するのではなく見守りながら、極力子どもに起こる、起こりそうな小さなトラブルはすぐに仲立ちや手助けをせず自分で解決することを学ぶ機会とし、子どもから援助を求められても「大丈夫、やってみたら?」「どうしたらいいだろうね」と近くで見守るようにするということを共通理解として保育するようになった。今年の3月に改訂（改定）された要領や指針のすべてにおいて、問題解決能力や学びに向かう力の育成が再確認されたところである。自分に関係する様々な問題・課題を自らの力で解決していく経験を幼児期から蓄積することがその後の育ちにとって重要だということである。これは保育歴が長い保育者ほど長年の習慣として身につけているため、簡単なようで難しい。そこで、職員全体の目標として「子どもの主体性と自己解決能力を伸ばすために活動を極力見守る」ということを目標に追加した。

本研究の目標の一つである「保育者集団のレベル維持」については、昨年度から全保育者が実践を振り返るためのツールとして「自己評価チェックリスト」を配布し記入することを始めたが¹²⁾、今年度も同じチェックリストで記入してもらった。自己評価の低かった項目としては昨年同様、「コンポストに関わる活動に取り組む」「自分自身でビオトープの多様な生物についての知識を増やした」「答えを与えないようにした」等の項目で、「菜園には行くがコンポストの蓋を開けてゆっくり見ることは少ない。」「目に見えての変化が遅いので乳児にどのように伝えたらよいか難しい。」等の記述が、特に乳児クラスの保育者に多くみられた。0・1歳児担当者に取り組めていないという感覚があるようだ。昨年も同様の結果であったので、低年齢児でどのような関わりが可能か計画段階から考え、無理なく生活の中に取り入れていけるようにしたい。反対に、自己評価が高かったのは、「保育者の感じたこと・考えたこと・伝えたいことを伝えた」「植物で遊ぶ機会を作った」「常に質問を与え、子どもが自分で考えられるようにした」「子どもの主体性を大切にした」「どちらがいい？何をしたい？かなど、子どもの意志をたずねた」等の項目で、「できるだけ先に答えを言わず、子どもが考えられるように待つようにした」「ビオトープに生えてきた草花で遊びを子どもと一緒に考えた」「クラスニュースでビオトープでの様子を分かりやすく保護者に伝えた」という記述があがった。保育者がすぐに援助するのではなく、子ども自身が考え、子ども自身が解決できる力をつける、子どもの発言や行動を見守り、共感するという保育の中で大切にしたい基本的な思いを職員全体で共有してきたが、それらについては保育者自身も努力している成果が現れている。自己評価チェックリストはあくまでも環境教育に対しての自分の振り返りを行うことが目的であるので、今後も継続していき、一人ひとりが自分の苦手な点を確認し、どのようにすれば改善できるかに気づくための素材とし、また、課題によっては環境を見直したり、カリキュラム・マネジメントの過程で取り上げたりして改善を図りたい。

今年度も職員の入れ替わりのため、実践研究が初めてという保育者が4名いたが、元々草花

やエコ活動に興味がある保育者たちであった。新採用者向けの研修を年度開始前の3月に行ったこともあり、大きな問題なく実践研究に取り組んでいた。また、今年度は園庭ビオトープの四季を一回り体験できた保育者が多く、新たに発見することも多かった。昨年度は、ビオトープを上手に活用するにはどうすればよいのかを考えすぎたり、植物や小動物の名前を正確に伝えられないといけないと思い込んでビオトープとの関わりをためらう姿が見られたが、今年度は普段の生活の中に園庭ビオトープの存在がなじんできた様子が見えてきた。

ビオトープ施工管理の専門家との勉強会も、月1回の事例研究会と別途に少人数で実施したことで、普段の様子や疑問など話し合うよい時間となった。具体的には、各自がどのようにビオトープに関わっているのかを振り返り、他の保育者と共有することを繰り返した結果、「難しいことを伝える必要はなく、子どもと同じ目線で共感することが大切」「ビオトープが特別な場所ではなく子どもや大人にとって楽しい場所になるようにしよう」と再確認できた。保育者がさりげなくビオトープにいて子どもが近寄って来た時に、子どもからの質問があった時には、その場ですぐに答えを出すのではなく「何だろうね。どう思う？」と子どもからの声を待ち、一緒に考えるようになった。また、子どもも保育者が何も言わなくても小さな図鑑や虫メガネを持ってきて比べたり、年齢の上の子どもが下の子どもに教えていたりするようになった。「子どもの可能性を信じ、すぐに援助しないようにしよう」と教わり、保育者の意識改革にも取り組んだ。勉強会を通してビオトープでの関わりだけでなく、毎日の保育の中で子どもに対する援助が少しずつ変容しており、それに応じて子どもの遊ぶ姿も変化し始めている。こうした取り組みを継続すれば、卒園するまでに、より高い問題解決力がついた子どもに成長することが期待できる。「保育者集団のレベル維持」は職員の入れ替わりや個人の意識、知識の程度に差があることから、全員が同じように実践力を身につけていくことは現実には難しいが、採用研修や勉強会等を通して、全職員が同じ意識で保育の向上をしていくことを今後も目指していきたい。

6. 次年度への展望

2015年4月から子ども子育て支援法が施行され、2017年には社会福祉法人制度改革が行われ、法人及び施設の運営方法に大きな変更があった。この間には業界全体で保育者不足が進行し、保育者の処遇改善も進んでいったが、園運営の観点から見るとその対応に追われた3年間だった。保育者の処遇改善はよいことであるが、同時に保育者としての働きがいも重要である。保育者の仕事は、子育てという人間の基盤をなす営みであり、現在と未来の社会を支える事業であることをしっかりと認識し、保育の仕事の素晴らしさと働き甲斐を味わいながら保育者として仕事に誇りを持ち、働き続けていけることが理想である。本園では環境教育を行って



いることがそうした誇りにつながっている。環境教育の進みは地道ではあるが確実に前に進んでいると実感する。最年長の子どもは3月に卒園して小学校に行き、新入園児と共に新保護者が園と関わりをもつようになる。新しい子どもたちには一からの環境教育が始まり「自然が大好きになる」「命を大切にする」精神が芽生えるように援助していく1年が始まる。保護者も環境を大事にしないといけないことを理解されている方が多いものの、理解の程度は多様であり、園では色々な場面で本園の取り組みを発信し、保護者の理解を深めていくようにしている。まずは、安全な保育を最優先し園に預けることに安心していただいた上で、園の様々な活動の中で環境教育が行われることを理解していただきながら、進んでいる。環境教育を意識した様々な取り組みは保護者にも好評であり、預けてよかったという感想をいただくことが多い。今年は新しく「緑育の会」を企画し、在園児だけでなく、卒園児や保護者、地域の方にビオトープの育成や園庭環境の改善に協力していただいた。普段の管理は園で行っているが、丸太橋の修理や垣根づくりなどを体験していただいたことで結果として子どもの遊び環境がより豊かになってきた。

毎年保育者の入れ替えがあるにもかかわらず、少しずつではあるが環境教育の取り組み方は前に進んでいる。例えば、従来から継続している屋内環境の展示や菜園、コンポスト、栽培活動と食育、小動物飼育などは本園の保育の日常として根付き、ビオトープの草なども少しずつ増えてきて、園庭も徐々に子どもの発達を促す環境に改良されつつある。次年度は、ビオトープにさらに木や草が増えるように子どもや保育者が努力を続けると共に、ビオトープ施工管理士指導の下、保護者や地域の方で構成された「緑育の会」を年に2回行い、子どもたちの遊びが広がるように保全していく予定である。「緑育の会」は緑豊かな場所にするというイメージで名付けた。多くの方が楽しく参加して、卒園児や保護者、地域の方が協力し合って活動する良い交流の場となっている。また、11月から月に1、2回「からふるデー」を実施することにした。この日は、保育者が事前に決めた活動をするのではなく、子どもたちは自分でしたい遊びを屋内でも園庭でもどちらでしてもよいという日である。子どもが遊びに没頭できるための

90分を確保できるよう保育の流れを工夫した。その結果、子どもが自分のしたい遊びをする時間を確保できるようになり、何をどんなふうに遊ぼうかと自主的に考える子どもが増えてきた。長い時間をどのように過ごすかは子どもの自由であり、保育者は子どもの要望があれば玩具や道具を準備する。室内遊びだけでなく、園庭での外遊びも根気よく遊ぶ子どもがたくさんおり、ビオトープが活用されている。保育者が考えもしなかった遊び（川造り、海造り）を考え出したり、工夫したりする姿があり、予想以上に力を発揮してくれている。保育者側は教えたり、遊びを止めたりしないような関わり方が難しく、試行錯誤しながら援助しているが、大きな手応えを感じているので、次年度以降もさらに「からふるデー」が子どもたちにとって自分で判断し、問題を解決し、考える機会となるよう、充実した遊び込みができる時間になるように計画していきたいと考える。これからも園全体を生命の循環する場所ととらえ、子どもの活動が自主的、主体的なものとなっているか、保育者は保育すべての活動で子どもを見守り、活発に活動されているかを観察し、環境教育を推進していきたい。

謝辞

ビオトープ施工管理を中心として本実践研究については（有）エコ・プランニング吉田順子氏から多大なる知識提供及び協力をいただいていることに感謝申し上げる。そして、毎年貴重な体験をさせていただく堺自然ふれあいの森の職員の方々、本園の実践をサポートして下さる保護者の方々にも感謝申し上げます。本研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号 15K00668）により実施したものである。

引用参考文献

- 1) 大仲美智子・海老澄代・米谷真夕子・霜野恵・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 幼児期の環境教育の観点から -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，1，pp.36-49，2011.
- 2) 大仲美智子・海老澄代・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 0歳児から5歳児まで，園全体の取り組みへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，2，pp.53-69，2012.
- 3) 大仲美智子・海老澄代・尾尻民・笹井邦恵・東直実・山口真由美・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 3 - ～0歳児から5歳児まで，実践2年目の育ちへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，3，pp.72-98，2013.
- 4) 大仲美智子・海老澄代・笹井邦恵・尾尻民・玉嶋範子・青山明日香・西山千晶・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 4 - ～保育者の意識を高める試みへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，4，pp.98-121，2014.
- 5) 大仲美智子・笹井邦恵・玉嶋範子・矢越里花・田中英里・安食絵美・丸谷菜摘・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 5 - ～保育士の主体的な取り組みの発展へ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，5，pp.41-59，2015.
- 6) 大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・福馬千裕・田中絢子・合尾ひとみ・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 6 - ～環境教育の視点からみる子どもの育ちへ -，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，6，pp.91-125，2016.

- 7) 大仲美智子・笹井邦恵・尾尻民・森川靖子・岡本なつき・井上美智子：子どもと自然・命のつながりを知る保育実践のあり方を探る - 7 - ～環境教育の視点から自然との関わりを深める～，大阪大谷大学幼児教育実践研究センター紀要，7, pp.75-101, 2017.
- 8) 内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領，フレーベル館，2017.
- 9) 井上美智子・無藤隆・神田浩行：むすんでみよう 子どもと自然，北大路書房，2010.
- 10) 井上美智子：幼児期からの環境教育 - 持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂，2012.
- 11) 前掲 7).
- 12) 前掲 7).